

B—98 ピエール・カルダンの美意識について

大分大教育 釘宮 久美

1. 作家の造形意志をたしかめることによって、コスチューム造形の方を知りたいと思った。
2. 1957年より1965年までの9年間にわたる作品を、ボグ誌よりコレクションし、考察をこころみた。
3. 肉体という限界ある空間に、布を素材として、技術的構成がなされる服飾造形の中でも、ヨーロッパの窄衣様式は、フォルムに、多面的変様がみられ、その追求に、造形の主軸がある。そこで、肉体との語らいにおけるフォルムの限界が、どこまで拡大されるか、興味のある

る一焦点であり、その拡大が、生活の現実空間の中に、いかに定着するか、興味ある問題である。カルダンの作品は、この間の課題を提供している。また、フォルムと材質との関連は、作品の決定に大きな要素となる。どのようなフォルムに、どのような材質が使われ、それがどのような美感を呈するか興味ある問題である。カルダンの作品は、この課題にも特徴ある挑戦をし、興味ある造形を提供している。